

11月27日礼拝説教(隅野瞳牧師)短縮版「最も小さい者の一人にしたのは」(マタイ25:31~40)

アドベントは、神の御子キリストが私たちを救うために人となつてくださった恵みを自分のものとして受け取り、再び来られる主をお迎えする信仰の備えの時です。この箇所は十字架の前にした主イエスのいわゆる「最後の審判」についての話ですが、やみくもに恐れるのではなく、神の救いの恵み、福音をしっかり受け取ることが大切です。

イエスは「兄弟たち」、しかも「最も小さい者たちのひとり」にした愛の行いは、わたしにしたものであると言われました。神の救いの御業を信仰によって受け入れることによって救われると、聖書は一貫して語ります。同時にその信仰には愛の業が伴い、それは切り離せないものだとも語られています(ヤコブ:15~17)。右に分けられた者たちが愛の業を行ったのは、彼らが主への生きた信仰を持っていたしるしでした。

小さい者とは、助けがなければ生きていけない者。こちらが愛を注いで助けても見返りが期待できない人です。自分で自分の罪をどうすることもできない私たちもまた、神の目に小さな者です。しかしそのような私たちのために主は十字架で死なれ、復活され、私たちは愛を知りました。

主イエスは貧しい中に生き、数に入れられなかった者や、苦しみ悲しむ者といつも共におられました。罪と弱さのうちに靈的に死んでいた者、飢え渇き、みじめで孤独な私たちの隣人となって主は私たちに仕え、十字架ですべてを与え尽くして、私たちの罪を洗ってくださいました。主の再臨を待ち望んで生きる信仰の歩みとは、礼拝につどい聖書を読むことだけに終わるものではなく、すぐそばにいる人との関係を大切にしていくことなのです。

終わりの日は私たちを恐怖に陥れるものではありません。「主イエスが私のところに来てくださる」のです。主の救いにあずかる私達にとって、その日は期待に胸ふくらませる時です。そしてその期待が、今まで自分の内側にしか向けられていなかった私たちの心の目を、「最も小さな者」に向けさせるのです。

主は私たちを新しい人として造り変える救いをお与えになりました。それこそが真のクリスマスプレゼントです。互いに愛し仕え合うことを通して、私たちは地上で主に仕え、喜びにあふれた主の羊として再臨の主にお会いしましょう。(終)